

川端康成「浮舟」論

吳 羽 長

—

昭和二十三年十二月川端康成は「浮舟の君」を『鏡』第一巻第四号に発表した。この作品は昭和二十四年十二月、『哀愁』（細川書店刊）に「浮舟」と改名して収められる。（以下本稿ではこの作品を「浮舟」として統一する。）

「浮舟」初出の前年十月川端康成は「哀愁」（『社会』）を発表している。その中で彼は自分が戦争中に親しんだ『源氏物語』に感じた日本の郷愁と戦争のさなか異郷にある軍人達が彼の文学（特に「雪国」）の中に感じた郷愁について言及し、『源氏物語』の「あはれ」の伝統が自己の作品に脈々と流れていることを自覚している。彼が「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰つてゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるひは信じない。」（『川端康成全集』（新潮社、新版）（以下『全集』と略記）第二十七卷三九一ページ）としてその「あはれ」の伝統の継承者たろうとすることを表明するゆえんである。「浮舟」はそうした『源氏物語』以下の古典と自己の命脈を自覚した川端康成が『源氏物語』に取材してその最後のヒロイ

ン浮舟に照明をあてて創作した作品であり、彼の『源氏物語』受容に重要な意味をもち後の彼の創作に大きな影響を与えるものである。以下私はこの小説「浮舟」を考察し、川端康成の『源氏物語』受容の実態を明らかにしてみたい。

なお「哀愁」「浮舟」以前に川端康成が『源氏物語』に論及したものととして東京帝国大学国文学科へ提出した卒業論文『日本小説史小論』（大二三・三）の「源氏物語」の章が注目される。彼はここで『源氏物語』が風俗・思想・感情等を含めた平安朝文化の一大辞書であり平安朝文学の頂点であることを述べ、その卓越性の具体的内実を藤岡作太郎氏『国文学全史平安朝篇』、五十嵐力氏『新国文学史』、津田左右吉氏『貴族時代の文学』^①の所説に委ねつつ、そうした卓越性は作者の天才以外に①作者の人格・学識②前時代・同時代の小説（物語性をもった仮構一般の意）の影響③時代の作者に対する鼓舞④仮名文の完成などの諸点に拠るものと論じている。そして最後に

私マイまた、「祝詞」、「枕草子」、「方丈記」、上田秋成、其磧、西鶴などと共に、散文学中の愛読書であるゆゑ、光源氏君は典型としても理想化され過ぎて、稍単調の嫌ひがあるが、多くの女達のタイプと、それに従つての恋の形と、その恋の情景と、この三の關係だけ

でも論じたいのであるけれども、限りなく長くなりさうだし、小論の前途洋々たれば、ここでは割愛する。(『全集』第二十四卷三八ページ)

と述べ、自身の私的な関心の対象としてこの作品に登場する女達とその恋の形・情景をあげているが、特にその関心が彼本来の陋巷趣味と共鳴する形で「東海道」(『満州日日新聞』昭一八・七・二〇)などを契機に浮舟に向けられ、「哀愁」における自己の創作の決意をふまえてこの「浮舟」が創作されたものであろう。「東海道」には、東海道に残る日本の美しさに見とれてそこにゆかりある平安・鎌倉・室町の文人の系譜に日本の精神史をみる主人公が『源氏物語』の浮舟に傾倒する『更級日記』作者の心情に共鳴している姿が描かれている。つまり文中孝標女の上洛直後の記事が上洛途上足柄山での遊女との出逢いの記事とともになざられているが、ここでは「光源氏の夕顔、宇治大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける。」という『日記』の文章を掲げたあと『日記』中にはない

九百年前のこの「文学少女」はまだ十四でありながら、夕顔や浮舟を自分の理想としたのだった。貴宮でも、紫上でもなかつた。

(『全集』第二十三卷三八六ページ)

ということばを入れてある。ここでは主人公を通して川端康成の浮舟に対する興味の深さをうかがうことができよう。⁽²⁾

二

「浮舟」は十の短章よりなる。第一章は序ともいふべく、浮舟をめぐる

る話が『源氏物語』の最後に位置し彼女が物語の終曲の女性であることと述べてそのことの意味の深さを示そうとする。更に

「源氏物語」は大方千年前の小説、しかもその後千年のあひだに、これに及ぶ小説は日本に現はれなかつた。作者の紫式部は三十七八歳で死んだやうである。してみると、この大作品は三十代の女性が書いたことになる。(『全集』第二十四卷五四九ページ)

と述べているが、この指摘は、『源氏物語』が小説史の頂点たること、作者の天才による所産であることという趣旨を含む点『日本小説史小論』「源氏物語」におけるこの作品の評価をふまえたものと考えられる。以下九つの章の内容を掲げる。

(一) 若い女が初瀬より帰る横川の僧一行に見出された。彼女は正気を失い、「生きてゐても用のない身です。人に見せないで、夜の川に落して下さい」というばかりであった。

(二) この女は僧の妹尼によって小野に伴われ、正気をとりもどす。彼女は尼になることを望むが、妹尼は亡くなった我が娘の再来かと思つて大切にした。

(四) 女はある夜、過去の自己の所行を思い出し物思いに耽つてついに妹尼の留守の間に大尼君(妹尼の母)に頼んで剃髪、尼になつてしまふ。

(五) 浮舟という女性は、薫の思われ人であった。薫はかつて宇治八宮の娘大君を愛していたが彼女は亡くなりその形代として大君の妹の中の君が大君によく似たもう一人の妹浮舟の存在をほのめかした。

(六) 浮舟は大君・中の君の異腹の妹で、母親は八宮にかえりみ

られなくなつて後常陸介の妻となり任国に下つていた。母とともに上京した浮舟を薫は宇治山荘で垣間見て、大君に酷似していることに狂喜した。

〔七〕 この浮舟は上京後、姉の中の君に預けられていたが、中の君の夫匂宮に発見される。語りかけつきまとう宮に浮舟は羞恥で身を固くしていた。これを知つた母親は娘を三条の小家に移す。

〔八〕 その後浮舟は薫に伴われて宇治に住む。大君のおもかげを宿す浮舟を前にして、薫は大君思慕の思いを新たにす。

〔九〕 以来薫の訪れは間遠であつた。その間隙に匂宮が侵入する。浮舟は匂宮のはれやかな美しさにも惹かれ、一方薫の訪れの際の細やかな心遣いに自己の所行を悔いている。二人の男はおのおの家をつくり浮舟を京に迎えようとする。折しも宮との逢瀬が薫に発覚し、浮舟は胸をつぶす。彼女は己が身を無きものにすることで、この窮状を解決しようとしている。

〔十〕 薫は比叡に参つた折横川の借を訪れ浮舟存生を知る。そのまま小野に赴いて彼女に逢おうと思つたが、その衝動をこらえていたん京に帰る。その薫の行列の灯火を浮舟が遠くに見送つてい

以上九つの短章のうち、〔二〕〔三〕〔四〕が『源氏物語』『手習』巻の内容から取材したもので以下、〔五〕は「橋姫」～「宿木」巻（おもに「総角」・「宿木」巻）、〔六〕は「宿木」巻、〔七〕は「東屋」巻、〔八〕は「東屋」巻末及び「浮舟」巻、〔九〕は「浮舟」巻、〔十〕は「夢浮橋」巻の内容から取材している。

この「浮舟」についてまず気づくのは構成的操作という点である。本来『源氏物語』のこの件りは、宇治にいる浮舟への匂宮の侵入、二人の

男性の間にはさまれた彼女の懊悩とその果ての失踪、その後横川僧都らによる救出、小野へ導かれそこでの剃髪、薫の浮舟存生の確認というふうに時間の流れにそつて叙述されているが、「浮舟」の場合、第二章から第四章では素姓のわからぬ若い女性が人知れぬことに深く思い悩みその果てに出家するという事件を描き、続く第五章から第九章では、浮舟という女性が二人の男性の間に余儀なく不倫を犯し入水を決意するまでことがたどられる。第九章の緊迫した雰囲気の中で叙述がもりあがり、第二章～第四章の時間との合流がなされてそこで描かれていた素姓のわからぬ女性が浮舟であつたことが読みとれるしくみになっている。こうして浮舟の苦悩にみちた精神の軌跡を完結させている。そして第十章では苦悩した浮舟をひきとろうとする薫の動きを描いて第二章以来の話を結末がつけられる。

このような意図的構成については、川端康成が『小説の構成』（現代叢書11、昭一六・八、三笠書房）において近代小説と物語の差異について論じたような認識がはたらいていたことと思われる。その論の要約を掲げる⁽³⁾。文中の「小説」とは『日本小説史小論』において使われた物語性をもつた仮構一般を指す意ではなく、より狭義な、主題・構想・方法等に明確な意識性をもつた近代小説の意味で使われている。

物語の筋組みは時間的継続のうちに配置されるが、小説は因果的関係において構成されねばならない。「王が死んだ。それから、王妃が死んだ」といふは物語であるが、「王が死んだ。その悲しみのために王妃も死んだ」といふは構成である。小説の構成にも、もちろん時間の脈絡はあるが、より因果の理論に負うのである。物語ならば、聞き手は「それから？」と尋ねるであろう。小説の読者は「ど

うして？」と考える。物語性と構成性との根本的な差異はここにある。小説には因果的に連続性のある緊密な構成がなければならぬ。緊密な構成には、「それから？」式の好奇心ばかりでなく、理知と記憶力とを必要とする。

このような認識において物語（『源氏物語』）の筋立てを取捨変形し、因果関係の明確な、緊密な構成をもって統一された小説（近代小説、「浮舟」）の創作がなされたものであろう。いわば川端康成の物語と小説（近代小説）の相異の所説を「浮舟」の創作においてあかしだてたともいうべきか。そしてそうした緊密な構成を全うするには、なお、叙述を年代的・時間的に積み重ねた形の物語に含まれる種々の要因——それが物語に奥行きを与え、人生の深さを暗示する——を捨棄してより単一性をめざさなければならない。「浮舟」の場合でも、『源氏物語』の中では浮舟が勾宮に発見され彼女の不幸の遠因となる中の君邸への寄宿には左近少将の婚約不履行の事件が与るが、そのことについては触れられていない。また浮舟の出家の遂行には僧都（「浮舟」では「僧」。以下、両者「僧」として統一していく。）の妹尼の娘婿中將の求婚が大きく関るが、これについても「浮舟」では大きな要因としては描かれない。浮舟失踪直後の薫をめぐる「蜻蛉」巻の内容も捨棄されている。更に、「浮舟」末尾（第十章）は薫が横川僧を訪れ浮舟の消息を知って後京へ帰るところで終るが、『源氏物語』ではこのあと薫の命をうけて僧の還俗を促す手紙を携えた浮舟の弟小君が姉をたずねる話が述べられる。浮舟はこの弟に対しても頑なに面会を拒み、そのいきさつを聞いて薫が不審を感ずるところで終幕になる。この末尾の省略については後に検討したいが、こうした幾つかの切り捨てを通じて川端康成の「浮舟」創作の姿勢をう

かがうことができる。いうなれば、薫・勾宮・大君・中の君・浮舟という人物達をめぐって種々の要因をとりこみその錯綜した関係を描く『源氏物語』宇治十帖の中で彼は浮舟に焦点をあて彼女が薫・勾宮の間において苦悩する姿を拾い上げそれを小説の時間として整理したのである。

三

そしてこのような浮舟の生の再構成が『源氏物語』の叙述内容を変改しておこなわれている点は見逃せない。ただしその変改は物語の文章中にない新しいことばを付すことによってその原文から大幅に飛躍した内容をとりこめるといえるものではない。むしろ川端康成がみずからの規準で選びとった物語中の文章について文学的效果を考慮しながらさりげなく現代文にかえているという態である。『源氏物語』の浮舟の処生にあくまで則り、変改はその文章をおもに取捨、もしくは配列換え等することでおこなわれているといえよう。そのような変改に自身の意匠をこめているのである。その特徴的な例をいくつかあげ川端康成がこの作品に描こうとしたものを探ってみる。まず第四章の浮舟が出家を決行する前夜の彼女の憂悶の様子『源氏物語』の文章と対照して掲げる。上段が「浮舟」、下段が『源氏物語』である。（『源氏物語』本文の引用は以下山岸徳平氏校注『源氏物語』（日本古典文学大系、岩波書店）に拠る。）

眠られぬ夜は、昔のことがいろいろと思ひ浮ぶ。生き返つたばかりに、また過去に思い悩まされる。——自分の父親だとい

昔よりの事を、まどろまれぬまゝに、常よりも、思ひ続けるに、いと、心憂く、「親と聞えけむ人の御かたちも、見たてまつらず、遙

ふ八宮のお顔を見たこともなく、遠い東国に育てられ、やうやく京に帰つて、母の引きあはせで幸ひ姉にもめぐりあひ、この中の君を頼りに思ひ、また夫と定める人も出来て、これからはこの薫の君に、身の不運を慰められようとする際に、自分にあさましい過ちをした。それに付けても、匂の宮に少しでも心ひかれたのが、自分でも分らない。匂宮のせゐで、かうしてきすらつてゐる。匂の宮にくらべると、薫の君は初めからあつきりとしてゐたとはいへ、おだやかに愛してくれたことが、時折なつかしく思ひ出される。自分が生きてゐると、この人に知られるのが、なにより恥かしい。しかしいつかはよそながら会へもしようか。それは未練といふものであらう。思ふまい。——さうしてやつと朝の鳥の声が聞えた時は、救はれたやうであつ

なる東を、かへるべく、年月を、行きて、たまさかに、尋ね寄りて、『嬉し、頼もし』と、思ひ聞えしはらからの御あたりも、思はずにて、たえず、さる方に、思ひ定め給ひし人につけて、やうく、身の憂さをも、慰めつべき際目に、浅ましく、もてそこなひたる身を、思ひてゆけば、宮を、少しも、『あはれ』と、思ひ聞えけむ心ぞ、いと、怪しからぬ。たゞ、『この人の御ゆかりに、さすらへぬるぞ』と、思へば、『小島の色』をためしに、契り給ひしを、などて、『をかし』と思ひ聞えけむ」と、こよなく、飽きたる心地す。はじめより、薄きながらも、のどやかに物し給ひし人は、この折、かの折など、思ひいつるぞ、こよなかりける。「かくてこそ、ありけれ」と、聞きつけたてまつらむ、恥づかしさは、人より、まさりぬべし。さすがに、『この世には、ありし御様を、よそながらだに、

たが、母の声が聞えたらどんなにうれしいであらう。(『全集』第二十四卷五五三・五五四ページ)

いつかは見ん(と)する』と、うち思ふ、なほ、悪の心や。かくだに思はじ」など、心一つを、かへさふ。からうじて、鶉の鳴くを聞きて、いと、嬉し。「母の御声を聞きたらむは、まして、いかならん」と、思ひ明かして、心も、いと、あし。(『手習』卷、三三三・三八四ページ)

両者を比べてみると、『源氏物語』にはそれに相当する記述のない「生き返つたばかりに、また過去に思ひ悩まされる。」という文章が加えられている点、匂の宮にかつて心惹かれたことを悔やむ思ひや最後の「からうじて、鶉の鳴くを聞きて」以下の部分が若干簡略になっている点のほかはおおむね文章を格にはまった短文にかえながらいていねいに現代文にしているといえよう。第二章以来の筋の、もりあがった箇所としてこの件りをそのまま『源氏物語』からなぞったと考えられる。それだけ彼は『源氏物語』のこの箇所の意味をおいていたのである。ただし『源氏物語』の場合、ここでの浮舟の憂悶を惹き起こす大きな要因としてこの文の前ところで中将の彼女への言いよりとそれを逃れて入り込んだ部屋での大尼君の恐ろしい就寝のさまが描かれている。「浮舟」ではそれがなく、前述「生き返つたばかりに、また過去に思ひ悩まされる。」ということばの挿入と相俟つてこの女の懊悩がより観念化し、存在の本源に関するものとなって前へおし出されているように思われる。また、同じく前述の「からうじて、鶉の鳴くを聞きて云云」の部分に描か

れる浮舟の複雑な心情が「さうしてやつと朝の鳥の音が聞えた時は救はれたやうであつたが、母の音が聞えたらどんなにうれいであらう。」と単純化されて、自己の悩みの苦しみから救われたような内容になっている点、あとの出家の決行との繋がりが強められて、川端康成が『小説の構成』で指摘した小説の因果的構成の意識が生かされているといえよう。

続いて第七章の終り、中の君の邸にかくまわれていた浮舟が匂宮に発見され執拗に素姓を聞かれ、そのことを知らされた母親によって三条の小家に移された折の叙述を『源氏物語』と比べてみる。

浮舟の君の母は翌日、乳母にこのことをしらせられて、あわてて女を三条の小家に移した。こ
こは前栽に花もなくさびしい。
昨夜あその後で、匂の宮とのことには触れないで、絵を見せて慰めてくれたり、故父宮のことを語つて添寝してくれたりした、
中の君を思ひ出しながら、またどこかに匂の宮の移り香が漂つてゐるやうな気もするのであつた。〔『全集』第二十四卷五五九ページ〕

旅の宿りは、つれづれにて、庭の草も、いぶせき心地するに、賤しき、東声したる者どもばかりのみ出で入り、なぐさめに見るべき、前栽の花もなし。うちあばれて、はれづしからで明かし暮らすに、宮のうへの御有様、思ひ出づるに、若い心地に、恋しかりけり。あやにくだち給へりし、人の御けはひも、さすがに、おもひ出でられて、「何事にかありけむ、いと、多く、あはれげに、の給ひしかな」（と）、名残、をかしかり

し御移り香も、まだ、残りたる心地して、おそろしかりしも、思ひ出でらる。〔東屋〕卷一八二・一八三ページ〕

上段「浮舟の君の母は翌日云云」の文章に相当する『源氏物語』の箇所は他の出来事も絡んで長い叙述になっているので省略する。川端康成は『源氏物語』から適宜ことばを取捨して簡潔性を保ちつつ浮舟の情動をなぞっているといえる。ここで最後の文章の後半「またどこかに匂の宮の移り香が漂つてゐるやうな気もするのであつた」ということばに注意したい。『源氏物語』ではここが「あやにくだち給へりし、人の御けはひも、さすがに、おもひ出でられて、「何事にかありけむ、いと、多く、あはれげに、の給ひしかな」（と）、名残、をかしかりし御移り香も、まだ、残りたる心地して、おそろしかりしも、思ひ出でらる。」と描かれ、時を隔ててやや平静さをとりもどした浮舟がその折のことを思い出し、宮の「あはれげ」なことばを辿りながらその場にある心持ちになつて宮の移り香さえ錯覚するほどになったときあらためて現実感ある宮の恐しさが沸きあがるように感ぜられたという内容になっている。それが「浮舟」ではそうした複雑な心情を追おうとせず、宮の移り香の幻想から浮舟が魅力的な宮にゆかしさを感じていることが暗示的に描かれ、彼女の心に宮の侵入をうけいれる姿勢が存するようにかえられているのである。このことは原文にはない色好み性⁴——禁忌を犯して情感のままに男性に接しようとする度合の強さ——が浮舟に意図的に付与されているものと捉えることができよう。

もう一例、第十章を『源氏物語』と比較する。

薫の君は叡山に参つた翌日、横川の僧を訪れ、浮舟の君が横川にかくまはれてゐることを知つた。亡き人とはかり思つてゐたがと、夢のやうな気持で涙ぐんだ。直ぐ会ひにと思つたが、今は御仏にかしづく人と、一先づ京に帰つた。

その夕小野では、青葉の山のかをりのなかで、浮舟の君の手習の君はもの思ひに沈みながら、遣水のほとりに尾をひいて飛ぶ螢を見るにつけても、宇治の日々を思ひ出してゐた。

その時、遙かに谷を見渡せる軒端に、貴人のお歩きらしい、前駆を払ふ声が聞えた。おびただしい松明の火が続いた。

「どなたの御行列でせう。今日お噂のあつた薫の君でせうか。」と、尼は言ふ。さうかもしれないと、浮舟の君も思つた。

小暗い道を行くその松明が、光の帯となつて浮舟の目にし

川端康成「浮舟」論（呉羽）

小野には、いと、深く繁りたる、青葉の山に向ひて、紛るゝことなく、遣水の螢ばかりを、昔おぼゆる慰めに、ながめ居給へるに、例の、はるかに見やらるゝ谷の軒端より、さき、心ことに追ひて、いと、多うともしたる、火の、のどかならぬ光を見ると、尼君達も、はしに出で居たり。

「誰が、おはするにかあらむ。

御前など、いと、おほくこそ見ゆれ。昼、あなたに、曳干たてまつれたりつる返事に、「大将

殿、おはしまして、御あるじのこと、にはかにするを。いと、よき折」などこそ、ありつれ」

み、ぼやけて遠のいたり、近づいたりしながら、やがて小さな点になつて消えて行つた。

浮舟の君はいつまでもじつと見送つてたはずんでゐた。（『全集』第二十四卷五六三・五六四ページ）

「大将殿とは」

「この、女二の宮の御をとこにや、おはしつらむ」

などいふも、いと、この世遠く、る中びたるや。「まことに、さやあらん。時く、かゝる山路、わけおはせし時、いと、しるかりし随身の声も、うちつけに交りて聞ゆ。月日の過ぎ行くまゝに昔の事の、かく思ひ忘れぬも、今は、何にすべきことぞ」と、心憂ければ、阿弥陀仏に、思ひ紛らはして、いとゞ、物も言はで居たり。横川に通ふ人のみなむ、このわたりには、近き便なりける。

かの殿は、「この子を、やがて、やらん」と、思しけれど、人目多くて、便なれば、殿に、かへり給ひて、またの日、殊更にぞ、いだしたて給ふ。（『夢浮橋』巻四二五・四二六ページ）

掲出文上段（『浮舟』）第一段落の「浮舟の君が横川にかくまわれてゐることを知つた。」という文の「横川」は「小野」が正しい。この段落の内容は下段『源氏物語』の文の最後の段落の内容が対応する。しかし

両者の間には明らかな違いがある。つまり「浮舟」では薫が他日自身で浮舟のひきとりに向かおうとする意志がみえるのに対し、『源氏物語』では小君にこの日の翌日浮舟のもとに向かわせているのである。「浮舟」には小君は描かれない。それは人物関係をより単純にすることで主題等を単一化・明確化しようとする姿勢ともとれるが、薫自身の訪れということには薫の浮舟に対する思いの強さをあらわすものがある。そのことは『源氏物語』で尼達が薫について語りあい「女二の宮の御をとこ」といっているのに対し「浮舟」ではその部分を簡略化して女二の宮にしているの言及をなくしていることとも関連する。女二の宮という浮舟の高位にある存在を消すことで「浮舟」では浮舟を薫の唯一最愛の女性としているのである。その薫が浮舟を自分の大切な人としてひきとろうとする。こうして「浮舟」は薫による浮舟のひきとりと救いとりを読者に期待させたまま「浮舟の君はいつまでもじつと見送つてたはずでゐた。」という余韻を含んだ文章をもって閉じられる。しかし『源氏物語』ではそうした調和的な結末はない。掲出のところでも尼達が薫について話すのを聞いて心憂く思いひたすら阿弥陀仏を念じて心閉ざしている。そして前述のようにこのあともひきつづき浮舟の迷いの姿が描かれる。彼女は薫の命を負って小野を訪れた小君との面会を頑なに拒み薫の手紙に返事を書くこともしない。自己の暗部をことごとく見透かされた薫との間にもとのごとくの愛の生活はありえなかつたのであろう。こうして潔癖に過去との間を遮断する浮舟にとって仏の救いが約束されているわけではない。彼女の出家後の姿は「宗教的なるものの磁場の中に自らを定着させ、そこに生を規制する堅固な枠を保持することによって、彼女はそうした危うい緊張にかりうじて耐えているに過ぎない。」「彼女の緊張が

緩むとき、彼女の前には再び衆生界の迷妄と苦惱が立ち現われるはずである。」⁽⁵⁾ という指摘の通り安住のない危ういものであった。川端康成はしかしそうした『源氏物語』の相を捉えようとはしない。彼は昭和四十四年五月の「美の存在と発見」（ハワイ大学ヒロ分校での公開講義）の中で、

紫式部は浮舟をいつくしんで、清浄のさかひへ静かにおもむかせ
て、「源氏物語」を終つて、余韻嫋々と残しました。（『全集』第二
十八巻四一二ページ）

と述べているが、ここでの浮舟の救い・余韻ある終章という解釈はまさに「浮舟」において彼が示したものであった。⁽⁶⁾

四

「浮舟」は前に論じたように第二、第四章及び第五、第九章の二つの時間の流れを第九章のもり上がりで収めるという構成において不可抗にも不倫を犯さねばならぬ運命を負って出家にまで至る浮舟という女性の姿を『源氏物語』に取材して辿っている。その間の彼女の苦悩が具象的レベルを離れより存在の本源に関するものとして描かれ、また彼女の心性について不倫という状況に陥りやすい傾向に描かれていることは『源氏物語』のその部分との比較で明らかになった。そうした効果的な原典の変改をおこないながら川端康成はこの作品で余儀なく運命に流され苦悩するはかなく美しい女性の造型を目論んだのであろう。なお不倫（破倫）ということに関しては、伊藤整氏が『千羽鶴』解説で次のようにい

われていることが注目される。

読者のために、少し立ち入って解説風に言えば、このような事件が容易にあり得るものとして作者はこの小説を書いているわけではない。（中略）だが人間がこの世に置かれている状態、すなわち人間がその感覚の受容性と道徳の支えとを意識して、美しいものに心ひかれ、社会の秩序の中に窮屈に詰め込まれている状態は、きびしいようでありながら、実は流動的である。

感覚に従って、その秩序の枠を乗り越えることは容易である。しかしそうすれば、他人が傷つき、したがって他人に与えた痛みを苦痛とする自分が傷つく。それは、破倫とか死とか自殺とかいうものが、何でもない日常性のすぐ隣に存在する、ということである。破倫を怖れるように我々は強く習慣づけられているけれども、感じやすい人間、純粹な人間ほど、ある時それを無意識のうちに乗り越えてしまう。すなわち、ある日何でもなく、自殺を招き、他人の死というものを招く。その最大の原因は美の感受性であり、また因縁である、と著者は言っているようだ。（『作家と作品川端康成（二）』、川端康成二『集英社所収』）

これは『千羽鶴』についていわれたものであるが、この「浮舟」を理解する上でそのまま通用する見解である。つまり、感じやすい純粹な人間が美しいものを求めて日常の倫理の枠を越えてしまい、それに深く悩み死に至るといふ構図はまさに「浮舟」のヒロインが演じたそれであり、川端康成は『源氏物語』に取材しながらそうした感じやすい人間の美しいものに惹かれる姿を増幅して浮舟像にとりこめたといえる。

更に「浮舟」終章ではこの、美しいものに感ずるはかない女性の魂に、前述のように薫による救い通りの可能性の暗示という形で救済と慰めが

与えられようとしているわけだが、この点に注目したい。川端康成は「哀愁」の中で次のようにいっている。

「土曜夫人」の悲しみも「源氏物語」のあはれも、その悲しみやあはれそのもののなかで、日本風な慰めと救ひとにやはらげられてゐるのであつて、その悲しみやあはれの正体と西洋風に裸で向ひ合ふやうには出来てゐない。私は西洋風な悲痛も苦悩も経験したことがない。西洋風な虚無も廢頽も日本で見たことがない。（『全集』第二十七卷三九三ページ）

ここでいう「源氏物語」の「あはれ」は宇治十帖の浮舟の生における「あはれ」でもあろう。川端康成はその「あはれ」が慰めと救いにやわらげられているという。それは感受性をもつはかない存在者の欠如を悲しみで充填しようとして沸きあがる人間性確保の情動というものである。虚無と隣あわせにそうした「人間のいのちのうつくしさ」・人間存在への信頼の姿が抱懷されているのである。川端康成は日本人の「あはれ」にそれを見ていたのであり、そうした「あはれ」の象徴的具現として「浮舟」を描こうとしたのではないか。

こうした慰めと救いに関連していえば、『千羽鶴』『二重星』の章（『二重星』は『別冊文芸春秋』昭二六・一〇に初出）に次のような記述がある。大田夫人の死後、菊治が彼の家を訪ねた文子と語る件りである。

「僕が結婚するだらうと、文子さんはたびたび言ひましたよ。」

「そんなの、三谷さんと私とでは、まるでちがひますわ。」

と、文子は涙のたまつた目で菊治を見つめた。

「三谷さんと私とは、ちがひますわ。」

「どうちがふんでせう。」

「身分もちがひますし……。」

「身分……?」

「はい。身分もちがひますわ。でも、身分と言つていけなければ、身の上の暗さつて言ふのでせうか。」

「つまり、罪の深さ……? それは僕でせう。」

「いいえ。」

文子は強くかぶりを振つた。涙が目のそとに出た。しかし、それは一しづくで、左の目尻から思ひがけなく離れて、耳の近くを流れ落ちた。

「罪でしたら、母が負つて、死んだんですもの。でも、罪とは思ひませんの。ただ、母のかなしみだったと思ひますの。」

菊治はうつ向いた。

「罪でしたら、消える時がないかもしれませんけれど、かなしみは過ぎ去りますわ。」

「しかし、文子さんが身の上の暗さなどと言ふと、お母さんの死を暗くすることですわ。」

「やはり、かなしみの深さと言つた方が、よかつたんですわ。」

「かなしみの深さは……。」

愛の深さと同じだらうと、菊治は言はうとしてやめた。

『全集』第十二卷一三三・一三四ページ

亡夫の愛人大田夫人とひき合うものを感じて関係をもった菊治は、その罪の重荷にたえきれず自殺した大田夫人——年齢を感じさせない無邪気なあどけなさをもち女性で浮舟の純粹さに通うところがある——の娘文子と母の遺した志野茶碗によって接近する。右の文章は、彼が文子を

家に招いて語るところであるが、不可抗な因縁により人倫から転落したはかない存在者が死に至るかなしみににおいて純粹に浄化される姿がこの会話の中に示されている。母娘のかなしみの深さが残された菊治の憂悶に慰めと救いを感じさせ、このあと文子が志野をわるといふその極点において彼は妖気ただよう因縁の呪縛から脱することを得る。

ここには「哀愁」「浮舟」で示された「あはれ」の慰藉と救済を確認することができる。川端康成は『千羽鶴』において「日本古来の悲しみ」を右のような形で実現したのである。

五

以上『源氏物語』宇治十帖との比較をもとにして「浮舟」の内容を検討し、川端康成がこの作品の執筆に意図したものについて考察した。彼は『源氏物語』の時間の枠を再構成し叙述の一部をさりげなく変改しながら浮舟の人間像に焦点をあて、その生を、余儀なく罪を犯し運命に流されるはかなく純粹な女性のそれとして増幅した。そして死に至るほどの彼女の憂悶の魂に余韻みちた雰囲気の中で慰めと救いを与えている。こうした人間像の造型において川端康成は「哀愁」で捉えた自己の『源氏物語』観（「あはれ」観）を再確認し、「哀愁」で決意したその「あはれ」を根底とする創作の姿勢をさらに促そうとしたものと思われる。

「浮舟」における『源氏物語』観は、晩年の「美の存在と発見」におけるそれ（前述）と重なりあうところから彼の生涯を貫くものだったといえよう。

そしてその『源氏物語』観は『千羽鶴』以下の戦後作品に多様に生か

されていく。『千羽鶴』の『源氏物語』受容についてはさきに若干述べたところであるがなお考察の余地がある。その他の作品の『源氏物語』受容の具体的考察とともに後日を期したい。

- (1) 『文学に現れたる国民思想の研究』¹
- (2) 川端康成による夕顔についての言及はみられない。山田吉郎氏「川端文学と浮舟」(『日本文芸論稿』第一号、昭和五六・一)にも『源氏物語』の正篇について川端康成の言及がほとんどないという指摘がある。
- (3) 鈴木一雄氏「物語文学の形成」(『竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』日本古典文学全集、小学館所収)に引用されたもの。
- (4) 山田吉郎氏は(2)の「川端文学と浮舟」で、川端康成の浮舟によせる関心の内実として、(1)形代的性格(2)色好み性を考えられている。
- (5) 菊田茂男氏「東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋」(『源氏物語講座』第四巻昭四六・八、有精堂)
- (6) この件りの直前で川端康成は梅原猛氏『地獄の思想』(昭四二)第六章「煩惱の鬼ども(源氏物語)」の中の次の一節を引用している。
 浮舟は、まさに鬼にも神にも憑かれ、人に捨てられ、はかりごたれた、行くところのない人間であり、横ざまな死をとげるしか生きる道のない人間であった。そういう人間こそ、仏が救いとるのだ。まさに大乘仏教の核心なのである。鬼や神に、しようのない煩惱にとりつかれ、生きる道を失い、自己の命をたたねばならないような人間、そういうしようがない人間こそ、仏が救う人間なのだ。それは大乘仏教の核心であるとともに、紫式部の確信であったかにみえる。
 「浮舟」で暗示された薫ひきとりという救済の形はここでの梅原氏の捉える仏による救いとりとは現象的に相反するものであることに気づく。しかし川端康成はそうした表層的レベルではなく、より根源的な「救済」という点で梅原氏の言説に共鳴したのであろう。
- (7) 杉森久英氏「解説」(『川のある下町の話』、新潮文庫)にあることは。

川端康成「浮舟」論(呉羽)

- (8) 「浮舟」と『川のある下町の話』との関係は(8)参照。
 薫による「浮舟」ヒロインの救いとりの構図によく似たものとして『川のある下町の話』(『婦人画報』昭二八・一〇二二)における義三とふさ子の関係があげられる。ここでは川端康成本来の構想と文体によって、彷徨の果てに憔悴した身を病院のベッドに横たえる薄幸のふさ子と彼女を救おうとする義三の姿が若者達の錯綜した関係の中に描かれる。はかなさと虚無を含みながら「哀愁」以来川端康成が抱懐していた美意識が「浮舟」終章の構図を得て具象的に実現した一例といえよう。

(鳥根大学教育学部国語研究室)